

## せいめい

中国における2011年の国内総生産（GDP）の伸び率は9.2%であり、2年ぶりに1桁台となった。中国政府は高いインフレ率を抑えながら政策的に比較的高い成長率を実現してきた。ところが、欧州債務危機の深刻化や不動産バブルなどで減速経済の予兆を感じざるを得ない。2008年9月のリーマンショック後も中国経済は回復が早く、世界経済は中国に依存する傾向が強かったが、経済の減速はグローバル経済の成長のエンジン役を期待できないのであろうか。

日本は1960年代以降、「東洋の奇跡」とさえ言われるような飛躍的な経済発展を遂げた。その結果、1968年には西ドイツを抜いて世界第2位の経済大国となり、40年余りその地位を維持してきた。しかし、1990年代には「失われた10年」とさえ言われるような経済の停滞が続いていた。ところが、中国は1978年末以来、改革・開放政策を進め、「世界の工場」と呼ばれるまでに発展し、ついに2010年のGDPは日本を抜き、世界第2位の経済大国となった。中国が世界経済に与えるインパクトには計り知れないものがある。リーマンショックで世界の多くの国々がマイナス成長のときでも中国はプラス成長を維持し続け、2008年に北京オリンピックを、2010年には上海万博とアジア大会（広州）を開催するほど発展した。その結果、中国人の富裕層は50万人を突破したという報道もある。

しかし、中国の経済が順調に発展し始めたのはそれほど古くはない。経済が成長し始めたのは中国が改革・開放政策に転じた1978年以降のことであり、それはわずか30年ほど前のことではない。中国は外国の資本と技術を導入し、深圳、厦門、大連など沿海部に経済特区をつくり、工業製品を輸出するという政策をとったので沿海部

では経済発展は著しく、大都市には高層ビルが立ち並び、道路には自動車が増えている。しかし、現代中国では、一部に繁栄を謳歌している人たちや地域もあるが、内陸部の農村ではその恩恵を受けられず、格差が拡大している。経済規模は世界第2位になったとはいえ、一人当たりの所得は日本の10分の1である。このほか、失業率の増大、大学生の就職難、インフレ、汚職などさまざまな面に経済発展に伴うさまざまな問題が噴出している。最近では、高速鉄道事故や子供のひき逃げ事件、官僚の汚職や若者の間の拝金主義などあらためて世界を驚かせている。

中国共産党が2004年に「和諧社会」、つまり各階層間で調和のとれた社会を目指すというスローガンを発表したのはこうした背景からである。さらに、2011年の共産党創立90周年の祝賀大会で胡錦濤国家主席は「中国を良くするカギは党にある」として共産党の変革に取り組み決意を示した。

2012年3月5日、中国の第11期全国人民代表大会（全人代）第5回会議が北京の人民大会堂で開幕した。温家宝首相が施政方針演説に当たる政府活動報告を行い、2012年の成長率目標を7.5%とすると表明した。2005年から7年連続で8%前後としていたのが、8年ぶりに7%台に引き下げたことになる。2011年の中国経済は9.2%の比較的高い成長を遂げたが、物価上昇率が政府の目標を上回ったことや住宅価格の高騰で国民から強い反発を招いた。政府は成長目標を引き下げ、規模拡大より成長の質や社会の安定を重視した持続可能な発展を図る方針を示したといえる。

本書は経済大国となった中国が経済成長戦略を転換せざるを得なくなった背景を明らかにし、その背後にある構造、つまり経済社会構造と国土構造、今後の課題について明らかにしたものである。本書は3部に分かれており、第I部では中国が改革・開放政策に転じた1978年以降の経済発展の歩みと世界第2位の経済大国に発展する過程で現れた中間層の成長、格差の形成、海外への直接投資、高速鉄道などの社会資本の整備、都市化などについて検討した。第II部では中国がグローバル化に対応するため北京や上海などの大都市を世界都市に成長させ、周辺の都市を巻き込んでメガリージョンが形成される過程を論じた。その一方で、沿海部と内陸部の地域格差が拡大した

ので政府が「西部大開発」や「東北振興」に取り組みざるを得なくなったことについて検討した。中国はグローバル化時代に対応するため国土の再編成に取り組んでいる。第Ⅲ部では中国が経済大国となったとはいえ、経済成長率が1桁台に鈍化した経済を今後も維持・発展させるために取り組まざるを得ない高齢化社会、人材育成、資源・エネルギー問題、環境問題、さらには日本との関係などについて検討した。

筆者は1987年に遼寧大学に留学したが、中国地理学会理事長の呉伝鈞博士、東北師範大学の張文奎教授、華東師範大学の程璐教授にはたいへんお世話になった。それ以来毎年のように中国に行き、現地を見、現地の人びとと交流を重ねてきた。中国の大学や地理学会の先生方、なかでも北京大学の李国平、柴彦威両教授、華東師範大学の谷人旭教授とは長い付き合いでもお世話になっている。中国研究では現地調査が欠かせないが、振り返ってみると、これまでずいぶん多くの人にお世話になりながら各地を歩いてきた。筆者にとってはまったく、驚きの連続であった。特に、2010年8月末から1年間北京の外交学院に中部大学との交流協定に基づいて交換教授として派遣された折には、大学の先生方や学生諸君と意見交換したり、北京市民の生活を通して貴重な経験ができ、さまざまなことを考えさせられた。これまで、中国について語るとき、中央、地方を問わず政府レベルのさまざまな統計類を使って書かれたものが多かったが、筆者は自分の経験をもとに国民（市民）レベルで現代中国についてその発展のプロセス、そして今どういう問題を抱えているかを明らかにするように努力したつもりである。

本書の出版に際してはいつもお世話になっている大学教育出版に今回もお願いすることとした。出版事情がきわめて厳しいにもかかわらず、佐藤守社長には快く引き受けていただき感謝したい。

最後に、本書が現代中国に関心をもつ人びとに広く読まれること期待すると同時に率直なご批判を頂きたい。

2012年4月

中藤康俊



中国 岐路に立つ経済大国  
― 四半世紀の中国を見て ―

---

目次

はじめに	.....	i
------	-------	---

第Ⅰ部 経済大国への道	.....	1
-------------	-------	---

第1章 経済発展と諸問題	.....	2
--------------	-------	---

1 改革・開放政策と経済発展	2
----------------	---

2 対外直接投資と経済圏	9
--------------	---

3 中間層の形成	10
----------	----

4 格差社会の形成	13
-----------	----

第2章 社会資本の整備・充実	.....	17
----------------	-------	----

1 高速交通体系の整備と鉄道事故	17
------------------	----

2 スクールバスの事故	21
-------------	----

3 情報化社会の形成	22
------------	----

4 サービス産業の発展	24
-------------	----

5 都市化の進展	25
----------	----

第3章 メガリージョン形成の課題 ..... 28

1 メガリージョンの形成 28  
2 経済開放地域の形成 31  
3 従来型成長モデルの転換 32  
4 持続的な発展 33  
5 グローバリゼーションの時代 34

第II部 メガリージョンの形成 ..... 41

第4章 環渤海経済圏の形成 ..... 42

1 環渤海経済圏 42  
2 天津市の地盤沈下 43  
3 世界都市・北京の都市問題 44

第5章 長江デルタ経済圏の形成 ..... 57

1 国際都市・上海 57  
2 長江デルタ経済圏 63  
3 郷鎮企業 67  
4 農民工の存在 68

第6章 内陸部・「東北振興」と「西部大開発」……………71

1 内陸部開発の可能性と限界 71

2 東北振興 73

3 東北三省の表玄関・大連 75

4 老工業基地・瀋陽の変貌 79

5 西部大開発 81

第III部 経済大国の諸問題……………89

第7章 格差・高齢化社会と和諧政策……………90

1 格差社会と農民工 90

2 人口問題と高齢化社会 96

3 和諧政策の課題 106

第8章 人材の育成と教育システム……………112

1 中国の教育システム 112

2 一人っ子政策と教育 114

3 大学入試 118

4 外交学院の1年 120



5 人材の育成と日本 126

第9章 資源・エネルギーと環境問題

1 資源・エネルギー問題 129

2 深刻な環境問題 135

3 環境対策 140

4 京都議定書 141

第10章 中国と日本の関係

1 日中国交正常化40周年 144

2 歴史に学ぶ 145

3 反日運動 150

4 尖閣諸島の問題 152

5 S M A P のコンサート 152

6 訪日観光 154

7 学生の訪日友好団 156

8 留学生が見た日本・日本人 159

9 戦略的互恵関係 161

10 「共生の時代」を求めて 164

おわりに

..... 169